

亀のアンソニー

楓  
はるひ

\* 人物表

滝川真理奈 (一四) 東京の私立中学二年生  
札幌在住。元大学教授  
亀田謙作 (八二) 東京の私立中学二年生  
望月良太 (二四) システムエンジニア。  
大林 真 (三二) 休職中。  
滝川美穂 (四〇) 真理奈の母

真理奈(一四) (N) 「亀のアンソニーのこと、その時はまだ何も知らなかった」

クウと何かが鳴く音。

滝川真理奈(一四) (N) 「私の飼っている亀のフランソワは時々鳴き声のような奇妙な音をたてる」

同級生1 「滝川真理奈、話かけないで、キモい！」

真理奈 「かけてないわよ」

同級生1 「うわっ！キモいの移っちゃう。みんな、行こ」

数人の足音、去る。

真理奈 (N) 「クウ。泣きたいのは私も同じ」

札幌・時計台の鐘の音。

キーボードを打つ音。

亀田謙作(八二) 「大林先生、キーボードに余計なキーがついておる、アルファベットだけでよろしい」

大林真(三三) 「亀田さん、それは記号などを打つ時に、早く打てるからですよ」

亀田 「どうせ、年寄ののろまな亀さ」

大林 「そんなこと言っていないじゃないです

か」

亀田 「いいや、心の中で思っておる」

大林 「思っていないですよ。八二歳でパソコンにチャレンジする情熱、うらやましいです」

亀田 「そのくらいの気持ちがなくはどうする！私が見るところ、先生は気合い不足だな。だから本業のシステム開発もイマイチで、こんな所でくすぶっているんじゃないかな」

大林 (小声) ほっちよいてくれ」

亀田 「あつ、先生が決めておいてくれといったメールアドレス、どんなのかわいいんだ？」

大林 「好きなのでいいんじゃないですか？」

亀田 「だから好きなのってなんなんだ」

大林 「なんでもいってことですよ。自分の名前つける人もいるし、彼女の名前をつけてる人だっていますよ」

亀田 「家内は一〇年も前に死んだ」

大林 「それは失礼しました。えーと、あ、あと、飼っているペットの名前とか」

亀田 「ペットか。ふむ」

大林 「飼われてますか？」

亀田 「昔、亀をな」

キーボードを打つ音。

亀田 (M) 「(たただどしく) 亀のアンソニー・・・っと」

学校のざわめき。

望月良太(一四) 「真理奈、パソコンのメールアドレス、教えてくれよ」

真理奈 「私に話しかけるといじめられるよ、良くん」

良太 「俺をいじめるやつなんていないよ」

真理奈 「そっかー。この中学のアイドルだもんね。いじめる人なんていないよね」

ドラムの音。

良太 「夢はプロのドラマーさ！」

真理奈 「夢、あっていいね」

良太 「真理奈は？」

真理奈 「ないよ」

真理奈 (N) 「あえていえばこの状況の打破」

良太 「どんがり過ぎなんだよ。お母さんと二人きりだから、気張るのは分かるけど」

真理奈 「親切なご忠告ありがとうございます」

良太 「真面目に聞けよ。シカトされてんの、見てられないんだよ。幼なじみとしてさ」

真理奈 「何、それ言いたかったの？」

良太 「違った。メールアドレス。ダブルループ始めたんだ」

真理奈「あつ、ミクシイみたいなのでしよう、  
会員制のインターネットサービス」  
良太「そつ。アドレス教えてくれたら招待状  
出すよ」

キーボードを打つ音。

亀田「先生、メールどこからも来ないんだ  
が」

大林「僕は何度か出していますよ」

亀田「お義理じやろ」

大林「そうじゃないですよ」

亀田「年寄りにはひがみつぼくていかんと思っ  
ているだろ」

大林「思ってますよ」

亀田「手紙は手で書くから心がこもるのであ  
つて、メールなど心が無い！便利は不  
便！」

大林「心が無いと言われると弱いですね。僕  
自身、コンピュータで心がすり減って休  
職した口ですから」

亀田「だろ。そもそも、インターネット  
だの、メールだの、なんなんだ」

大林「コンピュータはネットワークに繋がっ  
て、なんぼ、の機械なんです。インター  
ネットは元々軍事目的で開発されたんで  
すが今は世界中を繋ぐツールになってい  
ます」

亀田「戦争の道具だったのか。軍隊にいた頃  
には思いもなかった世の中になった

な」

大林「戦争に行かれたんですか」

亀田「特攻隊の生き残りだよ」

大林「ご苦労されたんですね」

亀田「その通り。そんな老人にメル友の一人  
ぐらい紹介しようと思わないのかね」

大林「(小声)メールは心が無いって言った  
のに。かなわないなあ。心当たり探しま  
す」

メール着信音。

亀田(M)「おっ！来てるぞ。あの先生、  
少々頼りないが親切だからな」

マウスでクリックする。

亀田(M)「(読む)」ダブルループへよう  
こそ。ドラマー良太さんからの招待状で  
す。"バーチャルな世界で楽しもうぜ"  
なんじゃこれは？」

水槽の水を空ける音。

真理奈(N)「フランソワの水は毎日換える。  
パパの四九日に公園で拾ってから五年経  
つ」

滝川美穂(四〇)「真理奈、来ていないわ  
よ」

真理奈「おつかしいなあ。良くん、招待状く

れるって言ったのに」

美穂「望月くんと同じ中学でよかったわね。  
お母さん心配してたの。イジメとか今、  
多いでしょう」

真理奈(N)「いじめられていること、ママ  
には言えない。交通事故でパパが死んで  
から、慣れないお勤めで疲れ切っている  
のに」

キーボードを打つ音。

亀田「先生、メル友、見つけてくれたのか  
な」

大林「あつ、いえ。忙しくて」

亀田「あれ、この間ダブルループというところからメールが来ていたんだが、先生じ  
やなかったのか」

大林「ああ、ソーシャルネットワークキングサ  
ービスですね。インターネット上の会員  
制のサービスですよ。メールとか掲示板、  
ブログとかの」

亀田「ブログ？」

大林「ブログ。ネット上に公開する日記で  
す」

亀田「面妖な。日記は人に見せるものではな  
いだろう」

大林「まあ、そうですけどね。ともかく招待  
状が来て初めて会員になれるんです」

亀田「しかし、招待状を送ってきた」ドラマ

「良太」なる人物、知らんぞ」

大林「ドラーマー良太」というのはハンドルネームですね。ネット上のペンネームみたいもんです。まあいいんじゃないですか、返信しても。メル友探していたんですから。世界が広がりますよ」

亀田「ふむ」

大林「若い女の子だったら危ないこともありまずけど、亀田さんだったら」

亀田「失敬な」

机をバンと叩く。

大林(M)「怒ること、ないっしょ」

メール着信音。

良太(M)「招待状が受理されましたメールが届いています」って。真理奈だな」

キーボードを打つ。

良太(M)「(読む)ドラーマー良太殿、お初にお便りします。小生、北海道は札幌に住む亀のアンソニーと申します。年齢、八二を重ねました。貴殿はドラーマーとのこと、昔、俺らはドラーマー やくざなドラーマー」という歌がありました、ドラーマーに関する小生の知識はそこ止まりであ

ります」なんだ、これ？」

学校のざわめき。

真理奈「じゃメール、間違つて、そのおじいさんに届いちやつたつてこと？」

良太「そうらしい。俺のこと、貴殿だつて」

真理奈「うわあ、時代劇みたい」

良太「俺、サムライじゃないし」

真理奈「拙者とか、なんとか候とか、書いてくるんじゃない？おもしろーい！」

キーボードを打つ音。

良太(M)「僕は東京の中学生二年生です。ドラムを小学生の頃から習っていてドラーマーになるのが夢です」

キーボードを打つ音。

亀田(M)「夢があるのはいいことですね。小生、長らく大学の教師をしていたので昨今の教育の荒廃を心配しておりましたが、貴殿のような生徒もいることを知りうれしく思います」

学校のざわめき。

良太「真理奈、ダブルループの招待状、携帯のメルアドに出し直すよ」

学校のざわめき。

良太「真理奈、ダブルループの招待状、携帯のメルアドに出し直すよ」

真理奈「うん、そうして。ダブルループって自分のページに友達登録できるんだよね？」

良太「そつ。で、友達の友達もダブルループ上ではメール交換できるんだ」

足音。

同級生1「滝川さん、望月くん迷惑がつてるの、分らない？」

真理奈「ただ話していただけだよ」

同級生1「それが迷惑なのよ。ストーカーじゃん」

良太「俺が話かけたんだ」

同級生1「気、使うことないわよ、望月くんが構うから、いい気になってんのよ」

真理奈「良くんは関係ないでしょ」

同級生1「ペット、亀なんだつて？変わつてるー。あつ非常食？スッポンだつたりして」

真理奈「フランソワは親友よ！私、帰る」

真理奈の走る音。

良太「真理奈！」

キーボードの音。

大林「亀田さん、打つの、早くまりましたね」

亀田「毎日メールしておるからな」

大林「ははあ。お子さんとですね。それともお孫さんですか？」

亀田「いや。娘はいたが、子供の時分に死んだよ。メール相手はダブルループで知り合ったドラマーだ」

大林「えっ、本当にダブルループの会員になつたんですか？」

亀田「先生が勧めたんだろ。無責任ですな」

クワツと亀が鳴く音。

真理奈（N）「翌日、学校を休んだ。私は手足を引つ込め、首を引つ込め、甲羅に閉じこもる。フランソワのように」

キーボードを打つ音。

良太「亀のアンソニーさんは先生だったんですね。同級生がイジメにあつてます。どうすればいいですか？その女の子はお父さんが死んでから、強がるようになり、クラスで無視されています。でも、僕は知っているけど、可愛いし、優しいいい子なんです」

キーボードを打つ音。

亀田「それは男子たる貴殿が是非とも守つてやらなければなりません。イジメなど愚

の骨頂、生物というのは一つとして同じ個体はないのです。生物学を教えていた私が言うのだから間違いない。自分も他者も存在自体が奇跡なのです」

キーボードを打つ音。

良太「彼女はフランソワという名でマイフレンド一覧に登録してあります。趣味は亀の飼育です。一度メールを出してくれませんか」

携帯のメール着信音。

真理奈（M）「（読む）」ドラマー良太殿からご紹介頂きました。フランソワ殿お初にお便りします。亀のアンソニーと申します。キジョ様？貴女様か。貴女様は（途中から亀田の声）亀を飼われているそうですね」

携帯のメールを打つ。

真理奈「亀のアンソニー様、メールありがとうございます。ごぞいます。」亀のアンソニー”つて変わったハンドルネームですね」

キーボードを打つ音。

亀田「昔、娘が飼っていた亀の名前から取り

ました」

携帯のメールを打つ。

真理奈「そうですね。その亀は鳴きましたか？私が飼っている亀は時々鳴きます」

亀田「普通、亀は声帯がないので鳴きません。アンソニーも鳴かなかつたと思います」

キーボードを打つ音。

真理奈（N）「メールは毎日来た」

亀田「学校はどうですか？腹立たしいことがあつても丹田に力を入れて、頑張るよう」

真理奈（N）「ただ時々分からない言葉が混じる。」丹田”つて何？」

キーボードを打つ音。

亀田「へその少し下のところですよ。ここに力を入れると、胆が座ります。良太殿から聞きました。イジメに悩んでおられると。そういう時は丹田を意識して下さい」

学校のざわめき。

同級生1「超、気持ち悪い、滝川さん、なんで来るの、ずっと休んでればいいのに」  
真理奈「ハズレにされて、来ないっていうの、

セオリ―通りでしょ、やなのそういうの」  
同級生1「うぎ、死ね！死ね！死ね！」  
真理奈（N）「一瞬息が詰まる。そういわれ  
ると、死んだ方がいいのかなあ、とも思  
う」

携帯メールを打つ音。

真理奈「同級生に”死ね”と言われました」

キーボードを打つ。

亀田「離れていて力になれないのが悔しい。  
臍を噛む思いです。しかし間違っても死  
ぬなどと考えないで下さい。生物学的に  
考えると貴女という個体はたった一つで  
す。何百億の人間がいろいろと遺伝子  
を持った個体はないのです。貴女は存在  
しているだけで、それだけで素晴らしい  
んです」

足音。

同級生1「滝川さん、来月の修学旅行、まさ  
か来るっていわないよね！」  
真理奈「私の勝手でしょ」  
同級生1「一緒の部屋になってくれる人なん  
て誰もいないわよ」  
真理奈「心配なく」  
同級生1「え？」

真理奈「一緒ってそんなにいいの？知って  
た？何百億人いたって同じ遺伝子の人は  
いないんだよ。私は私。ひとりだって全  
然平気」

同級生1「それがなんなの！ねえ、滝川さん、  
どうして嫌われるか分かってる？そうい  
うところがうぎいの！」

真理奈「触らないで！危ないじゃない」

同級生1「むかつくの！シカトされてるって  
分かって、言い返すところがさ！」

ドンと真理奈を押す。

真理奈「きゃ！」

階段を転がり落ちる。

美穂「階段から落ちるなんてドジね。痛み引  
いた？もうすぐ修学旅行でしょ、大丈  
夫？」

真理奈「別に行きたくないから」

美穂「札幌、いいところよ。学校で何かあつ  
たの？」

真理奈「何もなければ・・・足、痛いから明  
日学校休む」

真理奈（N）「翌日から学校に行かなくなつ  
た。甲羅に閉じこもるフランソワは私  
だ」

真理奈（M）「ねえ、フランソワ」

ピチャッと水のはねる音。

携帯メールを打つ音。

真理奈「アンソニー様、とうとう学校に行け  
なくなりました」

キーボードを打つ音。

亀田「無理に行くことはありません。最近年  
を取ったせい、昔のことを思い出しま  
す。前にアンソニーという名前は娘が飼  
っていた亀からとったというお話はしま  
したね。その亀がどうなったか、お話し  
ます」

インターホンが鳴る。

真理奈「良くん、来てくれたんだ」  
良太「ずっと、休んでるからさ。足どう？」

キーボードを打つ音。

亀田「小学生だった娘はある年の冬、亀を冬  
眠させようと、多分、誰かに聞いたんで  
しよう、亀をタオルに包んでタンスにし  
まい込みました。春になってそれを開け  
ると当たり前ですが、干からびて死んで  
いました。亀はタンスの中では生きられ  
ません」

ブリッジ。

真理奈「たいぶいいけど」

良太「修学旅行行けるんだろ？」

キーボードを打つ音。

亀田「ミイラにだけはならないで下さい。お願いだ。フランソワさんの生きられる場所はきつとあります。良太殿から、来月修学旅行があると聞きました。札幌にいらっしやるそうですね。お会して励ますことが出来れば身に余る光栄に感じます」

良太「アンソニーさん、メールで心配してた。

札幌にくるなら会いたいって」

真理奈「・・・でも行けない」

良太「何、この封筒」

真理奈「中、見てみて」

ガサゴソと封筒を開く。

良太「カミソリの刃だ！」旅行に来るな、死ぬって」

携帯メールを打つ音。

真理奈「亀のアンソニー様、残念ですが、修

学旅行には行けません。ミイラになってしまうから。アンソニーを飼っていたお嬢さんは今はどうしているのですか」

キーボードを打つ音。

亀田「娘はアンソニーが死んだ翌年、病気で亡くなりました」

亡くなりました」

携帯メールを打つ音。

真理奈「亀のアンソニー様、寂しくないですか。夜、一人で泣きたいことはないですか」

キーボードを打つ音。

亀田「寂しくはありません。たとえ一人で死んでいくことになっても、一人ではないのです。ちよつと難しい話になりますが、遺伝子の構造を知っていますか？DNAはそれぞれ一本の糸のようなものが二本絡み合い結び付き、二重らせんになって、私たちの生命の元を作っているのです。命は成り立ちからして一つであって、一つでない」

携帯メールを打つ音。

真理奈「一つであって一つではないって、ど

ういうことですか？」

携帯メールを打つ音。

真理奈「最近、どうされてますか。メールがないので心配しています」

携帯電話メール着信音。

真理奈（M）「アンソニーさんからだ！」連絡したいことがあります。電話番号を教えて下さい」って・・・変なの。えっ」と私の電話番号は090の・・・」

携帯電話が鳴る。

大林「フランソワさんですか？」

真理奈「そうですが・・・」

大林「僕は”札幌中央病院”のボランティアで、パソコンを教えている大林といいます。亀のアンソニーさん、ご存じですよ」

真理奈「はい」

大林「実は入院しているんです。ここ数日、病状が悪化してしまつて。修学旅行があると聞いてました。何とか参加して、ほんの少しでも立ち寄って頂けないでしょうか」

羽田空港、飛行機の発着アナウンス。

同級生1「滝川さん、来ちゃったよー」

ドン、と人がぶつかる。バッグが落ち、ガシャンと何かが割れる音。

真理奈「ワザとでしょー!」

同級生1「よそ見してたそつちが悪いんだよ」

良太「やめろよ!」

飛行機の音。

アナウンス「まもなく新千歳空港に到着します。気候は晴れ、気温は摂氏一五度です」

良太「アンソニーさんに会いにいくだろ」

真理奈「うん、時計台の近くの病院だつて」

札幌・時計台の鐘の音。二人の足音。

真理奈「つき合わせちゃってごめん。先生に叱られるね」

良太「関係ないって」

足音、止まる。

良太「札幌中央病院、ここだ」

エレベーターの扉が開く。

真理奈「緩和ケア病棟・・・ホスピス?」

ノックの音。

大林「はい」

真理奈「こんにちは」

大林「ドラマー良太さんとフランソワさんです」

真理奈・良太「はい」

大林「電話をした大林です」

真理奈「あの亀のアンソニーさんは?」

大林「お二人を待っていたのですが・・・昨日、夜半になくなりました」

真理奈「嘘・・・どうして」

大林「もう何年も癌を患っていて、入院を繰り返していました。ご自分の死期は悟つてたでしょう。でもとても前向きでやんちゃで明るい方でした。最後まで社会を構成する一人として世界と繋がることを忘れてはいませんでした」

良太「病気だつて、そんなこと一言も」

大林「死にゆくものが未来ある若者を煩わせることは無用、と言ってましたからね」

でも年の離れたメル友が二人も出来たつて喜んでいました。僕にもメールに心がないと思つたのは誤解だった。こんな病み衰えた老人でも、他者と繋がる立派な仕組みだ、コンピュータはすごいって・・・僕が逆に癒されました。そして

真理奈さん、あなたのこと、本当に心配してました」

ウィンドウズパソコンの起動音。

大林「ここにあなた宛のアドレスが入った書きかけのメールがあります」

真理奈「(読む)前のメールで最近昔のことをよく思い出すと書きましたね。今日もそうでした。窓から見える高く青い空はとても懐かしいものでした(亀田の声になる)それは娘が生まれた日の空であるような気もするし、家内と結婚した朝の空のようでもあります。ああ、でもこの果てしない高さは・・・八月一五日のあの日、玉音放送を聞いた後、見上げた空と同じだ。悲しみと悔しさを押し退けて、体内から溢れ出る解放感、これで生きていられるという圧倒的な歓喜。生きることに戻ることには喜びなのです。(真理奈の声に返る)フランソワさん、だから決して自殺などしないように。最後にもう一度、あなたという個体は・・・」

大林「・・・そこで終わっています。容体が急変して、キーボードが打てなくなつたんです。でも苦しい息の下から私に言いました。もしあなたが来たら、続きを書いてほしいと」

真理奈「そんな・・・出来ないよ」

良太「真理奈、書けよ、書けるよ!」

キーボードを打つ音。

真理奈(N)「・・・あなたという個体は世界でたった一つ。そして一つであって一つではない。自分は他人で他人は自分です。それはゆるやかに繋がっています。私は高い空の下から見守っています。いつも隣にいることを忘れないで。亀のアンソニーより」

キーボードを打つ音、止む。

メールの送信音。真理奈の嗚咽。

時計台の鐘の音、鳴り響く。(了)